

子どもも目線からみた子育てを語ることはなぜ難しいか

—感性教育で気づかされたこと

小林隆児

西南学院大学大学院臨床心理学

子どもの気持ちを感じ取ることで成り立つ育児という営み

これまで育児困難は養育者目線から語られることが大半で、子ども目線から語られることはほとんどなかった。乳幼児は自らのことばで自分を語ることがほとんどできないからである。

しかし、育児は養育者が子どもの気持ちを感じ取ったり、汲み取ったりすることなしには成り立たない営みである。その象徴的な関わりが乳児の泣き声に適切に対応する養育者の姿に示されている。泣くことでしか訴える術をもたない乳児を相手に、その気持ちに成り込み、子どもが求めているものに応えるこ

とが強く求められるからである。そこでは養育者は子どもの泣き声だけを頼りに感じ分け対応するのではなからう。いつおっぱいをあげたか、睡眠はどうだったか、いつおしっこをしたか、昨日の今頃はどうか、最近気がなったことはなかったか、気候はどうか、夫婦関係はどうか、自分（養育者自身）の精神状態はどうかなど、時と場合によって様々な状況を踏まえながら、今この子はなぜ泣いているのかを感じ分けるのではなからうか。その一方で泣き声自体も次第に分化し、養育者は感じ分けることが容易になっていく。こうして双方の関係は好循環を生んで深まり、子どもは人間らしく成長発達を遂げていく。

子どものこころは全身の動きで表現される

このような関係の深化のプロセスでは、情動を介したコミュニケーションが大きな役割を果たしている。育児困難な乳幼児と養育者との関係をつぶさに観察していると、いかに子どもが養育者のこころの動きに敏感に反応しているか、それとともに、いかに子どもの今現在の気持ちや全身の動きに如実に示されているかをも思い知らされる。たとえば、乳児の足先を見ていても、そこに乳児の表情を見て取ることが出来るほどで、子どもは全身の動きで自分を表に現しているのだとつくづく教えられる。ことばのない世界でこれほどまでに自己表現が可能かと感動すら覚える。

子どもの気になる行動は養育者との関係の中で生起する

今日、発達障害は脳障害を原因とし、その結果としての障害特性をもつものとされている。その一方では障害特性とやらが生後数年間の乳幼児期早期にどのようにして生起するのか、そのプロセスはブラックボックス化されたままである。脳障害と病態（つまり脳とこころ）の関連をどう考えるか、納得のいく理論を筆者は寡聞にして知らない。

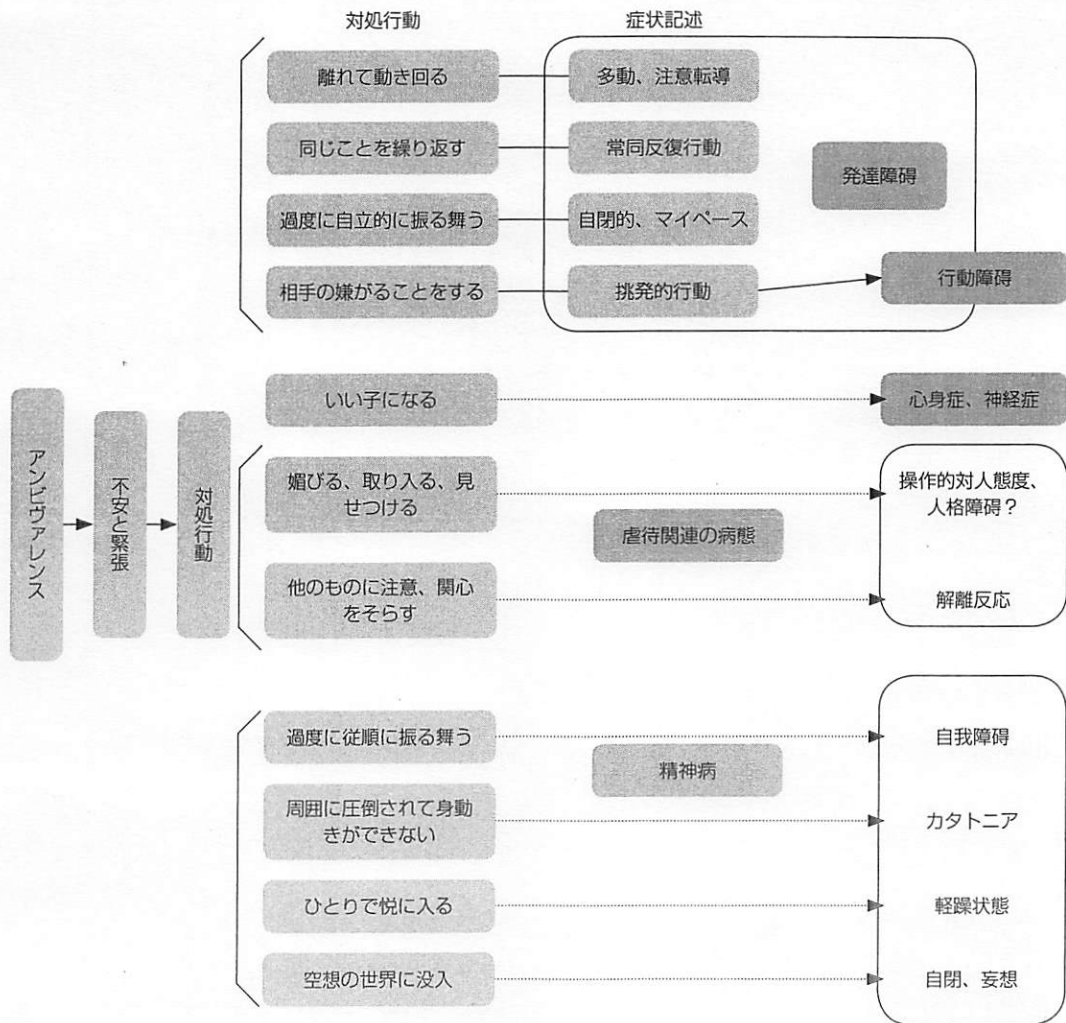


図1 アンビヴァレンスへの対処行動、症状、そのゆくえ

筆者は発達障碍のリスクをもつ子どもたちの生後数年間に養育者との関係の相対的に克明に観察した結果、子どもにみられる気になる言動の大半は養育者との関係の中で生起するものであることがとてもよくわかった⁽³⁾。子どもは養育者に対して「甘えたくても甘えられない」ゆえにいつまでも強い不安と緊張に晒される。それゆえ少しでもそれを紛らわそうと、あるいは和らげようとして様々な対処を試みる。それらの対処行動がのちのち精神医療現場で「兆候」や「症状」とみなされ、発達障碍診断の最大の根拠とされていく。その概略を筆者は図1のように描いた⁽⁴⁾。

症状の背後に蠢くアンビヴァレンスという情動の動きを感じ取ることの大切さ

このことはわれわれに重大な問題を投げかけてくれる。「症状」や「兆候」を脳障碍のエヴィデンスであるかのように扱うことは発達障碍の問題の核心からずれた枝葉末節の議論ではないかということである。発達障碍問題の核心は対人関係の質そのものにあるのであって、なかでもとりわけ情動水準のコミュニケーションにある。図1に示したように、そのルーツは「甘え」のアンビヴァレンスにあることから、治療の焦点はアンビヴァレンスに当てる必要がある。そこではアンビヴァ

レンスという情動の動きを治療者がいかに感じ取り、治療的に扱うかが問われてくる。

「関係の相」で初めて捉えることができる子ども（このころの動き）

すでに発達障害の子どもたちの生涯発達過程（乳児から成人に至るまで）で実に多様な精神病像が出現することはよく知られている。それらすべてを列挙すると、一般精神医学のテキストに記載されている症状の大半が含まれていることに気づかされる。神経症・心身症様症状から精神病様症状、さらには行動障害や虐待関連症状に至るまで実に様々である。

このような現実を前に、これまで乳幼児期の症状は一次的なもので、思春期以降の症状は二次的なものであるとみなす考え方が幅を利かせてきた。乳幼児期の症状は脳障害を直接の原因としたもので、その後に出現する症状は心理社会的要因によるものだというわけである。このような考えがいまだにまかり通っているのは、生後一、二年間に子どもと養育者とのあいだでどのような人間模様が繰り広げられているか、その実態を養育者との関係の相で丁寧に観察しようとしなかったからである。

ここでなぜ筆者が「関係の相」を強調した

かといえば、発達障害研究においてはこれまで世界中の研究者が乳幼児のみを観察対象としてその特徴を描写し検討するという方法をとリ、そのことになんら疑問を呈することがないことが筆者には不思議でたまらないからである。乳幼児のみを取り出して観察することが、いかに現実の子どもの生き様の理解を歪め妨げているか、筆者はいやというほど目の当たりにしてきたが、このことは今さらウイニコットの言を俟つまでもないことである。

なぜ「関係の相」で捉えることは困難か

筆者にとってはごく当たり前と思つて行つてきた「関係の相」で親子をみるのがなぜこれほどまでに困難なのか、その要因を検討する必要性を、筆者はこの数年とみに感じるようになった。

そこで筆者は数年前から、乳幼児を養育者との関係の相で捉えた実態を、近い将来臨床現場で活躍する人材である学生に観察する機会を提供して、彼らがそれをどのように捉えているか、感じたことを自由に出し合い、互いに率直に議論し合うという教育的試みを開始した。ちなみにこの試みを筆者は「感性教育」と称している。

子どもを「関係の相」で捉えることを敢えてしようとするのは、ひとつには母原病の後遺症にあらううことは容易に推測できるが、そのような単純な理由だけではないことが筆者には次第にわかってきた。

「個をみる」と「関係をみる」との本質的な違い

旧来の「個をみる」と「関係をみる」との「関係をみる」との違いを一言でいえば、リアリティ (reality) とアクチュアリティ (actuality) の差異にある。ふたつの用語とも目の前の「現実」を表すが、両者は根本的に異なるものである。

リアリティは「……がある」というように、一場面を切り取り、動かし難いものとして存在する現実であるが、アクチュアリティは時々刻々と変化し続けるプロセスそのものを意味し、リアリティのように容易にことばで切り取ることのできない相の現実である。この現実を肌で感じ取るためには、相手のこころの動きに観察者（臨床家）自身も身を委ねながら、ともに感じ取ることが求められる。実際には対人関係の当事者のひとりであるにも関わらず、まるで黒子のようにして観察する態度とはまったく異なったものである。これまで発達障害の原因を子ども

にみようとするとする態度は、リアリティとしての現実のみを扱い、アクチュアリティとしての現実から目を背けているものだと言つてよい。

アンビヴァレンスは子どものデリケートな情動の動きを示すゆえ、それを感じ取るためにはアクチュアリティとしての現実を直視することが求められる。

アクチュアリティを捉えることの難しさ

「接面」(鯨岡⁷⁾)で立ち上がる間主観の事象は当事者にしか実感をもつて語ることでできない性質のものであるが、そのことの重要さは精神療法を生業とする者にとつてはいわずもがなはずである。しかし、多くの臨床家がそのことに無自覚で目を向けようとしなのにはそれなりの理由がある。その一つは先に述べたアクチュアリティを捉えることの難しさにあるが、それと同時に、およそ二〇分ばかりの新奇場面法(以下SSP)で繰り広げられている母子のドラマを「関係の相」で見ることが非常に難しいこともわかった。学生たちは子どもや母親の行動を実に事細かく観察し報告するが、肝心要の母子間に流れているところの動きを感じ取ることがとても難しい。彼らと議論していくなかで次第にその

理由もみえてきた。

観察者自身の「甘え」体験の質で自らの情動不安が惹起される

ある学生では、母子関係に問題を抱える多くの事例をみるなかで、母子間の息詰まるような不安と緊張が彼(彼女)にも共振し、それが引き金となって自らの情動不安が惹起され、目の前の母子関係の様相を観察すること自体ができなくなるという事態が起こるのだ。

驚くなかれ、このような反応を示す学生が、五、六人も相手にすると少なくとも一人は出現するのだ。彼らの反応はフラッシュバックであるが、彼らと三日間朝から夕まで集中講義で徹底討論する過程で、彼らがどうしてこのようになったかをともに考えていくと、目の前で観察している母子関係が引き金となつて自らの幼少期の母親との屈折した「甘え」体験が蘇り、そこで体験した情動不安が賦活されたのだというところに学生自らが気づく。その結果、観察している母子の間に立ち上がっている情動の動きを感じ取ることが自体が困難になつていたのである。母子関係にみるアクチュアリティとしての現実を把握することが難しいのにもそれなりの明確な理由があつたことだったのである。

子どものこころの動きを捉えることを可能にする感性

その一方で学生の鋭い感性によつて筆者自身が改めて気づかされる体験もある。

二歳一カ月の男児で、自閉症を疑われての受診であつた。早速、SSPを実施して母子関係の様相を観察した。母親は懸命に子どもに遊びを促すが、子どもは母親を終始避けるようにして他の遊びを続けていた。三分後にストレンジジャー(ST)が入つてきて、まもなく母親が退室した。すると、子どもは母親への態度とは対照的に、優しく相手をしてくれるSTに対して、控え目ながらも徐々に一緒に遊び始め、数分も経つと自分からSTの手を取つて遊びに誘うまでになつた。その時である。母親が部屋に戻つてきた。それに気づいた子どもはすぐさまその手を引つ込めて、母親の方に笑顔を向け、小走りに駆け寄つて行つたのである。

このシーンを見たある女子学生は、STと遊んでいるところを見られた子どもは、母親に対する恐怖心から、まるで何事もなかつたかのようにして母親の機嫌をとるように近寄つて行つたのではないかと説明した。つまり彼女はそこに子どもが母親に「媚びを売る」姿を発見したのである。

私はこの学生の観察力の鋭さに感銘を受けたが、その一方である女子学生は、子どもが母親に向かって笑顔で駆け寄ったところだけを取り出して、子どもにとって母親がいかに偉大な存在であるかを強調していた。その学生は日頃から他人の目をいたく気にして振舞うところが目についたが、今現在このような学生はとても多い。

子どもは養育者の前では「甘え」を覗かせない

発達障碍研究は今や当事者目線から語られる時代になった¹⁾。しかし、それは自らのことばで自分を語ることのできる大人の場合であつて、子ども目線で論じられることはいまだに皆無である。

育児は子どもの気持ちを感じ取ることなくしては成り立たないが、発達障碍（とみなされている）の子どもでも例外ではないはずである。しかし、それがなぜ難しいか、それにはそれなりの理由があるのだ。彼らは「甘え」のアンビヴァレンスゆえに、自らの「甘え」を養育者の前ではけつして見せようと思わない。それはいけないことだと経験的に思い込んでいるからである。しかし、STという他人の前ではそんな思いを覗かせるのだ。

子どものアンビヴァレンスを
感じ取ることを困難にするもの

このような彼らのアンビヴァレンスという繊細で容易には捉えがたい情動の動きをわれわれ臨床家が肌で感じ取るためには、自らの感性に委ねるしか術はない。しかし、それを困難にしているものは何か。感性教育を受けたある女子学生の感想を読むとそのことがとてもよくわかる。

——これまでSSPの動画を見て、自分の中に湧き起ってくる感情を感じることがどういうことなのか、身をもつて体験することができた。もし、言葉で子どもと母親がやり取りをしている動画であれば、自分はきつとその言葉の内容にばかり気をとられてしまい、母子の間の関係に目がいかなくなつたと思う。言葉がないからこそ、母子の間の関係や、心の動きを感じ取ることが集中できたのだとも思う。私にとって、SSPの動画から子ども心の動きを感じ取ろうとすることは、時には少し苦しいなと感じることもあつた。思い出したくなくても、自分の幼いころの感情が自分の中に湧き起ってくるし、幼いころの自分に向き合っているような感覚になるからである。幼い頃のことを自分は忘れていると思

っていたけれど、少しのきっかけで記憶は蘇ってくるもののだと感じる。

私は自分の中に湧き起ってくる感情を言葉にして表そうとすると、どのように表現しているのかわからなくなってしまう。感じていることを言葉にすることの難しさを感じた。ある事例を見ていて、自分の中に起こっている感情を表現しようとすると言葉に詰まってしまうことがあつた。そのとき、先生（筆者）に「幼少期に自分の感情を抑えてきた人は自分の中に起こっている感情に気づきにくいことがある」と言われて、自分で気が付いたことがあつた。私は「さみしい」という感情をあまり感じたことがないと思つていた。しかし、動画の中で子どもを見ていて複雑な感情が起ころのは、自分自身がアンビヴァレントな感情を体験しているからではないかと考えるようになった。母親に自分の幼少期の頃のことを聞いたとき、私はあまり手がかからなかつたし、育てやすかつたと思うと言われた。今思い返すと、幼いとき本当は周りに気を遣つていたのだと思う。気を遣つていたのは、母親が周りに気を遣う様子をずっと見てきたからで、自分もそうしなければならないと無意識に思つていたのだと思う。

私が発言した言葉が伝わりにくいのは、自分の言葉に対するためらいや、自分自身に起

こつている感情をどう表現したらよいかわからないというのが大きい。先生に気づきを促す言葉を少し掛けてもらうだけで、自分の中で腑に落ちるようにして過去の記憶を思い出すことができた。先生の面接場面でも同じことが行われているのだと思う。私はこの授業を通してこの気づきを体験したのだと思う。まるで自分がカウンセリングを受けたような感覚だった。――

筆者は彼女の率直な感想に深く胸を打たれるとともに、今後彼女はアンビヴァレンスを自らの体験を通して感じ取ることのできる臨床センスの豊かな臨床家になるのではないか。そしてまたぜひともそのように育つてほしいと心から願う。

育児困難は他人事ではない ――感性をいかにして蘇らせるか

精神療法におけるアンビヴァレンスの捕捉の重要性とその困難さを指摘したのは土居健郎である。彼はつぎのように述べている。⁽²⁾

――「集団療法でいかにして患者を理解するかについて語る中で『筆者注』この甘えとアンビヴァレンスとは実は背中合わせなのである。(中略)したがって、その辺の事情を

承知していれば、日本人のグループ過程に伴う葛藤を十分に捉えることが可能になるのである。それはしばしば非常に微妙な、それこそ言語化されないような、声の抑揚、身振り手振りといったような所作であることが多い。ただ、このような微妙な手掛かりを捉えるためには、治療者自身十分「甘え」の心理に習熟していなければならぬだろう。なによりも自分の甘えがわかっていなければならぬ。言い換えれば自分のアンビヴァレンスが見えていなければならぬ。そしてそれこそ最も困難なことであるといわなければならないのである。――

筆者の感性教育の試みは土居が晩年にわれわれに投げかけたこの課題に答えようとするものであるが、臨床現場ではまったくといっていいほど感性の重要性は顧みられない。感性教育を試みて、その重要性を痛感するが、今の学問の流れはそのことにあまりにも無関心すぎるのではないか。

学生(学部生や大学院生)相手に感性教育を行うと、彼らがいかに瑞々しい感性を潜在的にはもっているかを実感するが、残念ながら本人自身さえその大切さに気づいていない。これまでの教育でその重要性を指摘されたこともない。それどころかそれを磨耗させ

るような教育ばかりを受けてきたとしか思えないのである。

次世代を担う若者たちの感性を蘇らせることなくして、今後の育児や育児支援はどうなることか。今筆者はその責任を強く感じ、感性教育の重要性を主張し続けなければならないと痛切に思っている。

〔文献〕

- (1) 綾屋紗月・熊谷晋一郎「発達障害当事者研究―ゆつくりといねいにつなぐたい」医学書院、二〇〇八年
- (2) 土居健郎「臨床精神医学の方法」岩崎学術出版社、二〇〇九年
- (3) 小林隆児「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム―「甘え」のアンビヴァレンスに焦点を当てて「ミネルヴァ書房、二〇一四年
- (4) 小林隆児「発達障害の精神療法―あまのじゃくと関係発達臨床」創元社、二〇一六年
- (5) 小林隆児「臨床力を高めるための感性教育」(研究叢書No.42)。西南学院大学学術研究所、二〇一七年(非売品であるが、西南学院大学のホームページの「機関リポジトリ」からpdfファイルを無料でダウンロードすることができる)
- (6) 小林隆児「自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く―関係発達精神病理学の提唱」ミネルヴァ書房、二〇一七年
- (7) 鯨岡峻「なぜエピソード記述なのか―「接面」の心理学のために」東京大学出版会、二〇一三年